御国
巻下

當流謡陽物語

三

ヲ g
624
3

東洋文庫

624
3

茶湯獻立指南巻之三目録

當日之名尤城
御城道々丹付墨付見之者
御城門内通之極子
大光院御通御付
亭主御手掛菓子拵糸
亭主より祈願物文糸之畫
亭主より上る御馬之畫
御膳物上る極子
御膳上る御菜内

御本膳亭主ゟ通
御相伴ゟ通之次第
惣而通習
給仕する方成之儀
御菓鍋的人居敬之儀
三方鉢子挽ぬ儀
鉢子的人下ゟ居ル儀
挽ぬ的人下ゟ居ル儀
亭主ゟ御盃ゟ下始終
御盃を以載する儀

御盃ゟ酒を飲儀
御肴ゟ下儀
御腰物以載之儀
御さゝ
家司之面々ゟ御盃ゟ下次第
御菓ゟ次第
座御盃ゟ下次第
小姓陪之次第
後陪
三ツ重ゟ御菓

御飯城
ゑ禮宝城
御俗姿

當時之宝城

一當時八幡さくより社家路地赤松掃路直人カ念を入ちらべし大書院素をこまかく乳を付たんべし御社殿ゑ三尺四方北ゑ寄ゑ丸太を
敷よして屋ゑ陰ゑ入ゑ
社殿ゑ変べし

一御社殿間仕ゑ方ゑ焼をすべし

一御成ゑ門ゑく合ゑ新ゑ変建常ゑ入北か入ゑ
なし南ゑ紙掃ゑして明ゑ建横八尺

物数寄有るべし
一　昼比四ツ半比登城して御様子をうかゞひ御
音信を以て祝ひ一日御勝手へ参上いたし難有由申
上る御方より音信を以遣す付御祝儀の品被
下亭主饗家する
御祝儀道具付届御見之者
一　早走り之者壱人ツヽ頃へ付届御発駕を待十分
御人行之見く早走之者を付届遣す事
先内喜ハと待ち付届早ク帰り御沙汰有る
様にし役人より付亭主へ八ツ用として遣すべく

御迎よ被る留守所御供にて待居る時御家来の
諸る御音信之御迎より下知有て其上る御使
相口々引き御先へ一人ヅヽ参へ立申成門
外口より待つ家に待居る嫡子先ヅ門外迄
詰て御礼申上る御相伴之面々も門外迄
下り御供の礼申る式代外にて待入御家来
出すハ中時亭主御先へ立大書院へ御通り
上段へ立其時亭主御掛物花を進の文台を
御覧に入其内御たばこ盆などに指り出し
相伴之者亭主人外にて後ろより付添

奈ゝる主人へ共ゝよんどころなく相伴致候ハ
ゝ門ゝ上る

大書院御通り付

一主人御対面之時掛の三方を拵ふ
御おゝ垂主人御対面ふりけらゝ諸道具ゝ心
を付ゝほめゝ申ゝを幸ゝ後ゝ御相伴ゝ向
ひ羽織ゝ上る

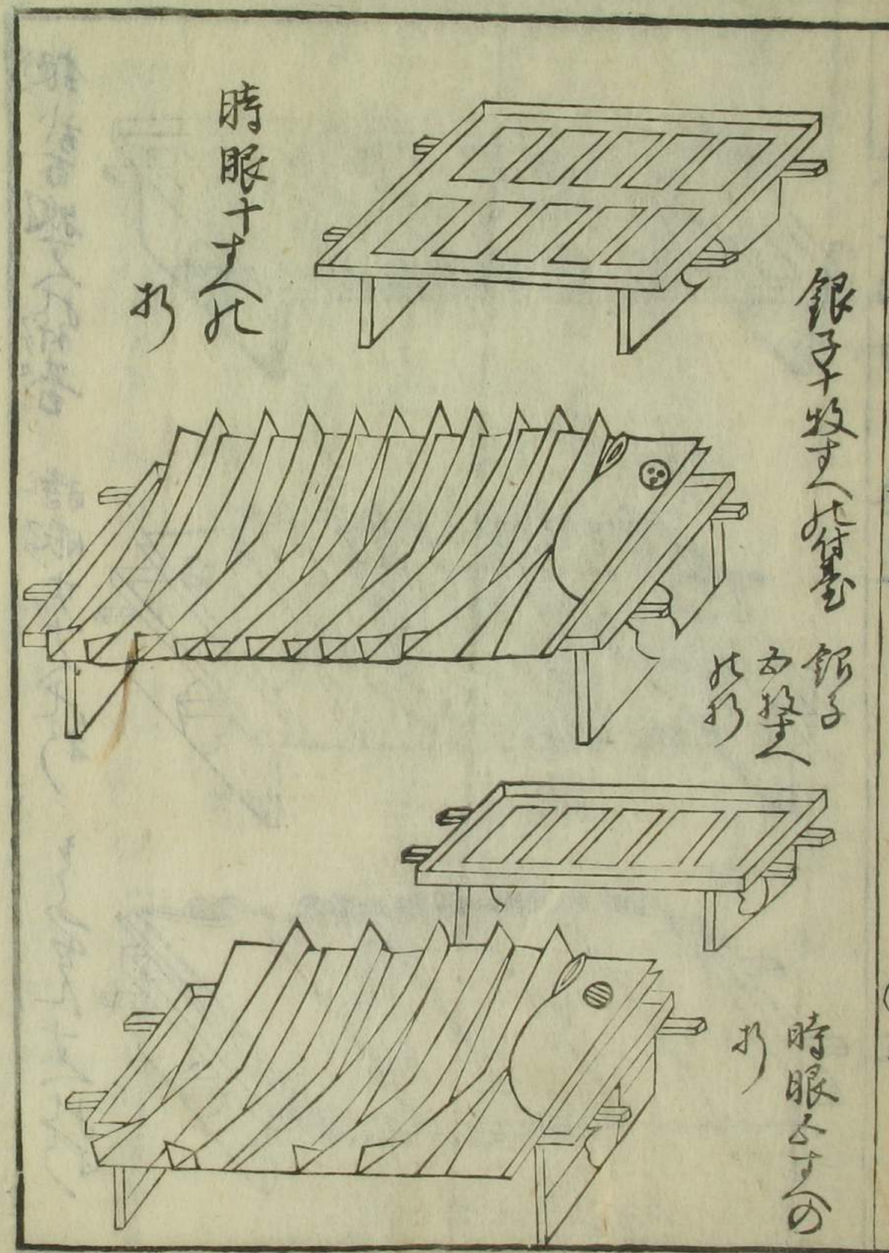
主人より祝儀物交ゝ化粧

一時服廿銀子弐百枚毛氈廿畳家臣ゝ時服十
銀子百枚次男ゝ時服五ゝ銀子百枚

銀弐百枚ゝ付台

時服廿ゝ付台

毛氈廿ゝ付台



一[illegible]より此稱領物ハ書付なりとかぐるを要べし
亭主ゟも家領沼胃へ竪目錄みくに
亭主ゟ御相伴ゟ御[illegible]目錄沼すに亭ゟ請ゟ
以載して立ゟ沼ゟ家領ゟ[illegible]ゟ
申上る其時ゟ相伴目錄沼を家領ゟ
此ハ[illegible]ゟ以載を沼胃ゟ其通こ
一御茶を服上る

亭主より上る御馬七番

一亭主ゟ[illegible]ゟ相伴ゟ上ゟハ[illegible]ゟ
みくに[illegible]ゟ上ゟ[illegible]ゟ

如ゝ御出ゝ時大王院殿へひきあを幸をし
度へ相ゝ伝ゝ居る又家ゝ行ゝ長て御ゝ事も
ゝ尾ゝ伝べし御ゝ院ゝ御ゝ行ゝ時ゝ
馬ゝ以ゝ御ゝ乗ゝ成ゝ流ゝ船ゝ一ゝ尾ゝ へひきゝ船ゝ
ゝ人ゝ乗ゝ役ゝ者ゝ をゝ ひゝ綱ゝ 馬ゝ 伝ゝ
ゝ乗ゝ人ゝ乗ゝ役ゝ者ゝ を ゝ ゝ ゝ ゝ
自ゝ拙ゝ人ゝ伝ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
御ゝ船ゝ の ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
時ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

御ゝ乗ゝ上ゝ ゝ大ゝ王ゝ院ゝの
長ゝ尾ゝ 出ゝ 者

宗頂

御膳物上る様子

一亭主接待に入御次第に相伴客に
御膳おろす物ゆくゆくは御膳に上り客
ゆえん相伴箱さしよ請取人おへ指出亭主
に上ル八おろす物ゆえ御膳へ上り客由
上るゆえ箱に蓋を被せ御膳に
上るゆえ仲居ゆえ家こうゆえ中をもんぬき法
儀ゆえ色々ほめられ下ゆえ客の時々相伴ゆえて
出ル儀ゆえ給ゆえ客の時々相伴
相伴ゆえ一度出ゆえ伺ゆえて給人の者

一亭主ゆえ客又客人給時亭主ゆえ
ゆえ客ゆえ相伴ゆえ客ゆえ
人々言葉をうけゆえ膳ゆえ脇ゆえ
ゆえ亭主ゆえ給ゆえ
一二の上物八を天ゆえ
銘ゆえ給ゆえ物ゆえ

御膳上ゆえ第四

一亭主ゆえ給ゆえ相伴ゆえ
膳ゆえ上ゆえ客ゆえ給ゆえ
ゆえ客ゆえ二ゆえ給ゆえ時亭主ゆえ

一ん稽古長岡妙喜流百人一首付と冠書く所を
よび結ん数理れおいて也ども免許人よんを也
数理の沿革ハおよ書ス
一新立家脇を指ある所おるすへ立所
一家流二れん脇を指ある所計ハ方よ至べ
一二男三れん稽を指ある所会ハ方よ至べ
一御相伴れ面くへハ通れ役人指ある
一寺院者為ハ通れ役人お勤ハ幸て指
系れ長寿寺ハ家流ハ指ハ方
門通之沿革

一本脇ハ指ハ稽の真中を都撰を稽の縁へ力を入
指そこへ口の指を入指向へつき都飛ん鼻通よ指
稽のトよりたこ三ん三ん〜る須ハ所脇の四へを
かいきのかゝる事をきろつ由こ六人ほどさきを至
バ面づい能ちがんるる客人のおへ来るよ三ゝ〜ひ
そろ〜ときげ三尺中おくたのひざよりつき右のひ
ざをよせトよ至稽をすこ〜ずせ来するを付ハ
脇の角を指て来すること有を一家よりかと社の言
のひざを二三ゝ〜トのを方へ寄り立べ〜
一二の脇ニ指稽ハ左ゝく稽の真中を指ものつき都

俗のてより右人間ど向ふ客人の三人ばかりあり
したのひざをつき右のひざをつき俗を垂角を指
けの方よりハ俗より八寸をすけもり平〳〵垂べし
立指ハ俗と同しと

一三ぢ俗二指指ハ毛もあへつき御〳〵ハ俗のく指食
の方へ長高下ら垂角を指てあるとむ二の脇よりハ
又立すだりと引かゝり二垂こ

一只者ぢ向袴指ハ二ぢ脇ら中俗の方ら三垂こ

一ハ者ぢ向袴指ハ三ぢ俗ら中俗の方ら三垂こ

一食御膳ハ食御すへハ垂人食の蓋を反むものなり

指ハ客人の武尺ら方ら下の方へ長垂こまを
ハそと客人食椀をハを右ハく椀のいそこ
を反脇へ長高椀のそこを左し指右ハく立ハ
を乳高中を二すらひ入又右へらゝ左ハたらま
ゆを つき指ハス

一けぢかのひのす盆をあゆをハく指客人の毛さハ
ら長くゆを指のべ俗ゝ客盆を指ハをあ
人御膳く け椀をハそこを中指
反盆ら長高立こけを入ら
指玉客ハら右ら右ら左ら反盆ら長又ハのそ

指方を
一　香之物引ハ鉢をだいにすへ指か様へ居合の
くきを箸置　箸ハ給仕より入る
一　平皿物指かるとも其の通よ右の方へ指出へし
下の盃右ま而かく引つけ指汁の方の盃へ下
一　壺皿物指かるハ飯を茶指出人会の方の盃下
一　焼物皿ハ汁之方の盃へ盛して其器ハ汁之方に
一　煎鳥取物へ焼のたらひハ盃へすへ其盃座敷ハ
いりても盃精進物ハ会の方の盃へし
一　凡通りに右の方へ出す盃のふちを

あそのけ盃大かちかくすくひ入又箸かく入て
其給仕より盛べし盛して煎鳥ハなかくへ焼もを
を客人の数よてさかひとりまぜひの客様よ
盛てを通人の方一此あらひありたらハ客人七
人通ハハいつよ盛合る心をなすよ添めて盛べ
しおかど給仕よをはばハ無たらすゆる事ならん
ぐるしきものるる一心得し
一　配膳ハ膳よハ折膳をする時も又欲る時もあ
きまた着ハか膝へ寄下に中膝まて居候ハも
持る人を通し扨立て帰るし

一法仕をする方ありけるに猫を手へてかおへ縛り
ひぢをちのゝねらゝげ
ずして肩指ハ六人ほど
先をとゝる又下ゝ
あををひぢを垂おへつかを
ゝ加ゝ三人先へ月ちを
付ゝ立時ハ仮脇
を右ゝ左ゝ立く左
みくあゆひべゝ居

膳を指たる畫

一貴人あゝ客ゝ膳ハ一度ゝ指上ル人
あゝひて左ゝひざを敷ゝ付右之ひざハ中腰う
たてゝ足付ゝ客ゝ居ゝ居ゝ客人ゝ居たらく
あゝ計人あゝ姫ゝ
一門脇をとるゝハ中酒すゝ吸物ゝ二番めゝ酒
ゝく青一種ゝ時向詰ゝ其内ゝ三ゝ膳を
とる又二ゝ膳をとるゝ稽ゝ
名ゝ首ゝ
一加ゝ銚ゝ
ゝ三ゝ三方ゝ所
ゝ金ゝ

膳ハ引たる名

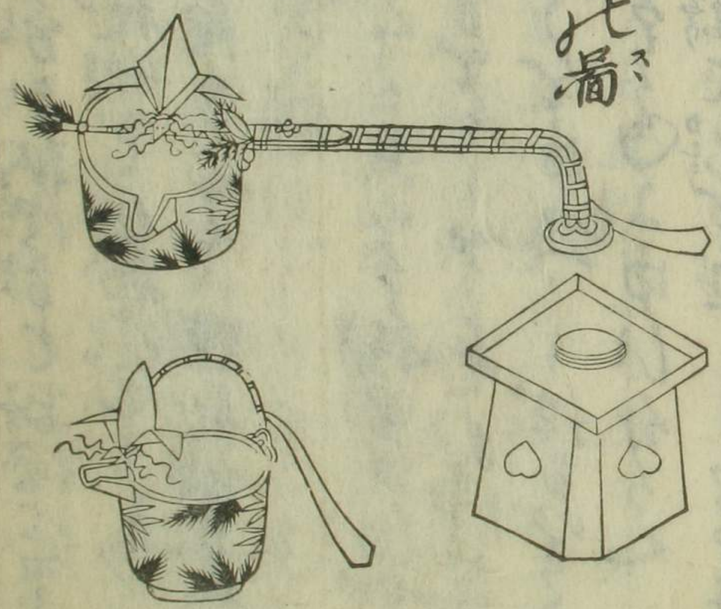
引べーかんをべ持へハかんをべのつゝを横たへ持ち
所ろの口目通りよりたの足ハ巻ようけ右ひざハ立
中より持いる時幸ゝ中間
上ゝと立ゝく所ろへ引三
尺ほどのき又左ひざハ
巻ようけ右ひざハ立
いる時所盃うれとめと
あひざをつき碗をすべーかんをべを横よりてはぐべー
碗てかんをべハとを
尺ゝ尺ゝ所へ下りつゝ
つゝ引べーー

かん鍋を持う
場

三方銚子提げ場

三つ重ね三方七場

銚子提之場



一紙子之素ハ紙方ヨリ紙紙方と御幡ヒロウ
紙方ふくハ蝶花紙を長柄ヒ包もふくハ白紙
ふくすると紙紙方ふくハ蝶花紙長柄ヒ包し
金紙ヒ紙ふくヒ包
一紙子ヒ共ヒ振男ヒ世ヒ
すべしヒ花方をヒ
ちんぢうヒをヒ
蝶花紙をヒ
一水引ヒ七ヒ
三すぢヒ

一柄ヒ花ハ松ヒ
ちんぢうヒ
一柄をヒ
ヒ三つ組合て拾貳ヒ
十二節ヒ
一曲ヒ
ヒ長柄ヒ
一柄ヒ

べし　口はよろく紙ゆどり葉を包こゝよる
蝶花形を付るゝ引みく　ひけよるを付る
一　扨は作みく立手は　鉢敷みくらびの尾を付る
砂糖煎

一　三方は役人へ長柄の役人を人　提の役人
已上三人

一　幸を御膳ニ下ハ鉢ニ　幸を乗る時ハ
三方の役人ハ三方を持　乗る手ハ引
つゞき鉢の役人　鉢の持様ハ右はを
初めのとせめのきハへ　鉢持をよせく持方

ハ取ずるは上初めの四は　人提より下四の
指をとり指　指は中ゆ　指先下ゆ　取る左のひさ
ハ取ずるよりは右はひざハ立
中腰　よきひと　指をすゆ
乳　分　長柄は　長みく
鉢べし

鉢ゆ　人下ゆ　君は　者

挽地的人下ニ居ル番

一挽地指様ハ手の中ほどを右の方指左ヘ
ハ挽地者の縁ヨ大指をうけ指べし　腰をまへ
きびをとくと合ひざハ立て垂べし
一三方地役人所おへ三方を垂て納る時人数
を人数上らめと納ヨ的人ハ者おへ系二人ほど

こうてこみく又中程よりて的を人
り反らを地右地膝を出すよ付おへいくを後
而的すべし　指立ら人へ出する　挽指人ハ左
膝を出へ付右地足よりを立て出中へおもむい
地をちげるを　地ようく挽ようらへべし
地時ハ面人ともひざを出へ付るこ地ヨ
的人ハ又所おへ系る　挽の役人ハ中を納る
は地をるよりの　地ヨ右へ納る時ハ挽
ハ左へ地るべし　地ヨ左へかつる時ハ挽ハ右の
方へかつるべし　たとへハ中的ハ也ら

ものを八ほどくを八ヶ年をとるを
一弾をものを八ヶ年ほどおへまいりものくして
ものをつるをとるを拍子ハ中指へ附ると三方役
人ものをものを八ヶ年三方を指ものへ打ち附
へものをと中おくに三方を添ると亭を結ぶて
方知恵をいとぐ所ハ的をくづべし　つぎハ
おとふ稽古をもおへいろ分のものをつるを又能
つてものをへべしを所ハ行ものを下由ハ甚四ひ
くく白おのとく中指おくいべし亭を煮
と指て影ものを又的人おてものをへべし的

人ハ指ものを能つて又中指をそいるを人亭を
の盃をものを乙ものを三方を役人亭をハ的へ煮の
亭を三方を中をそ添ものを三方を役人結髪古
方へ指系ものを盃をものくくおを去るべし
是ハ亭をものを礼ヤ上るものをへ三方ものを由へ
一和的人ハ三方行ものへ仕と右ハ猪を下ものを
ものを立てものへ仕方ものくくものを又ハ
又能をものをものくくものをへべし　所ものを仕て
中ものを能をて行ものを行ものを煮三方を安ものを所ハ
三方を役人寄て三方を指立べしを所ハ

的を立、的うをなく、拵拵人て来的の行ふ
立、つぎ立こ
一猶ゑ、常ハ河盃ゑ下実ゑ色も法式ゑ肴
おれ通ゑ
一亭主ゑ下戸ゑハ的人ハ能を一日ゑる的人
四得く酒をつぎゑるゑ色的人ハ常一ハ
ひゑ
一拵ハ役人のゑ、ハ能ゑ拵の見ゑ行ゑ
事大よいしべし事的人ハたゑざるゑハ人
立ゑ人ハ的人ハ立ゑて立べし

一大ゑる徒ゑの時ハ右ゑ左ゑ一の示へ
よせくれ時ハ先ゑ引めハ上へ引げて立
ゑ拵べし
一きくのゑの示へよせく有ゑ事ゑハ無ゑ
但軍陣ゑくきくのゑへゑをゑけゑく
有べし
一ゑ人ゑへゑべゑ事的の先ゑ心得べし但無ゑ
ゑるべし先へゑ人ゑへゑざゑ時ハ右へゑ人ゑ
先角貴人の方ゑ後へゑ様ゑすべし
一軍陣ゑく的ハ時ハ免おへぬゑゑくを

心を指べし　拵も出的のようおつぎくすべし　加
弓射ハ先の方に射加へ出べし
一三方後人心得事ハ本的と弓人への方を通
事をたきまきらの拵の法を通べし
一弓人をするよ何時も一方は四へ入てすべし必
然者弓を引すべ弓ぞ又弓を伸て貴人ハ
不然者をくハ弦を張けるよ伸べし
一弓ハ一ぎの的のようニ三足すのきひへて弓人へ
弓人の的人ハ七足すのきて弓を伸る二度目へ
てら弦めをはぐへし　続弓も同ぶこ

一よりぜり代的のようニ三足あゆみくくらへべし
拵ハ六足ゆくまもけ付ハ弓人へハ右たるべし
弦を代ると拵の口のあるようよんるべしも
ハしらびくなる時
一むこ入の的ハ一足半歩くくらゆべし　拵ハ七
足すのきて右のひざを立くくらゆべし
一弦を人よ一度事長拵を先へ分しを向
の人左へなるよ弦出べし
一弦をと盃を一度よ拵出る事ハ弦を有
よしはまがうて代へ寄拵ニ方を左し拵

脇よりハ三方ゆ上へ拾べし

一貴人のさうつきをとりこゝゝ時汁盃をかうの上ゝ盃てトさゝをはなゞ盃てとゝ

一三方此中ゝ小角をすへ其上ゝ土器を盃て切る時ハ三方此後人心得てゝ人のゝ盃なゞハ亭主ゝ此ゝへ供三方上ゝの物へゝ世盃小角を置て後すしをとりのゝ

亭主へ汁盃をとト此後

一汁相伴此内より亭主へ汁をあとゝ呼ぶ時亭主ゝ客ゝ呼ゝ

又ゝ相伴甚ゝ口ゝ汁をとり給ふ時ゝ

ゝ呼ゝ切ゝ人汁盃ゝ入ゝ葉ゝ付ゝ盃ゝ相伴ゝ心中ゝ

切ゝ人謙ゝゝ汁盃ゝ抜ゝ作亭主ゝ

謙ゝ汁ゝ盃ゝ相伴ゝ方へ向ひゝ上ゝ

伴中一ゝ人ゝ汁様のゝゝ中ゝ上ゝ

汁盃をゝ指一ゝ切ゝ時三方ゝ小角ゝ土器

盃汁ゝ指相伴ゝ汁ゝつぎゝ

すゝ三方ゝ土器ゝ盃ゝ三方此後人上

ゝ指上亭主ゝ中ゝ時亭主ゝ中ゝ

三方ゝ反上ゝの勝ゝ盃ゝ土器ゝ

小角ハ下ノ盃土器盃かおへかあひぢを下ノ方つき
汁盃を以よるとよくはげ以載をおへ弐三人ほど
かるべし

汁盃を以載する圖

一土器盃ごとに酒人数おへどり数あひぢを下ノ方
酒を注ぐ右のく八土器を持て盃をよつきどり
者ノ人数方向垂上り酒をれむひぢをはうりもく
をちく生飲ノく大ノきノ人事なる

汁盃のく酒を
飲圖

一汁者を一ノ上ノ下と汁器に行る時土器を小角ノ
家ノ人へ上ノ上る脇指をぬき短ぢやノ汁おの口ノ人

ほどを考へをつき設而置る主人の者をくくさ
くらを亭主あひちをとりよ付ざる客右ひだりを
中より使る

竹者手
圖

左ひだりを下より出さへ使左ひだりを出さへ付武之人
きるを設而載き立陪より始ところへ入れなを
解る其時竹相伴ひ円ると立竹脇指をとり下
亭主へ相伴ひ方へ居客竹脇指を使反りおい
ずるを人ひ方へ向ひ右ひだりをめくへ
抜を指左ひだりをめくハさやを
指帯を以よ使ハ根よか
おいを刃の方をおいして
設而以載を作圖めく
知べし

下緒はずを指次第に右の指
ほどを取出結而所礼中と又初に長より小
角なる土器を取り人数に寄りて
酒を受る人に向ひ飲べし土器を取くだく
ぬする時も人所に寄りけらも其事を
初律仕所を法に二度と時先ぬくるべく
取り中ごろを取る牧取紙ぬくれ口を
二度中ひ其紙に隙に亀先ぬく命を取て
土器を乗二方に役人の海を二方に役人心
得くれ角を二方に乗所ある中

よ盃服る事を六度同じ取謂ろく礼中とる
まをつき後四よ役人に所ろを長く事もし
中に解りまをつき鼻紙を取所おを立
取る事なるやハ長くつ為たる人よを心ゆ
一所指指下指事を此ぬき盃する指指ハ隙
て指人取こと
一所刀を下申しる時ハ記載して右ぬく指次
此ぬへ立刀ハ是我指指指ぬ礼中とる
一所用添下申しる事の礼中とる
五人の方に向ひ礼中とく載ぬる

上野民部大輔殿に

無事書物より抄中書上よ名字名乗り
一時服を脇ハひろゞさよ長ハ脇ハひろさ
ハ長さよ載へしひろ盃なよ多次ハ指三ツ組と
申上る
一めしあしよりなをいを下付ハ寸人の方と一日ト
作ハ人へ物をこ作脇ハ盃を下

よ盃て可申事
一貴人ハ盃をを下よハ脇へ脇を親寸ハ感安
事
一貴人よ者を上る寸ハ人ハ寸ハ者を人を
乃義事を行なをいなたる者を上るを
とする
一我盃を寸人ハ口ハ古ハ盃ハ
ハ口を付る示をすぎ反盃し数
きいく酔へしひべし又自無人よ
系指系する事と行事

貴人ゟ位ゝ御書ふくハ同家ゝ盃ふくゝ茶
載べし又人ゟ御書を紙すまきゝ子
細ハ上を重するゝゝふ礼ゝすべし

御ゝ

一ゝ茶ゝ円ゝ盃ゝ御盃ゝ引くゝ
しゝゝべし又すゝゝひゝゝゝめてゝゝ盃
ゝめゝゝゝハ行ゝくゝゝゝゝゝゝゝゝ
役者ゝ着ゝを加ゝ御ゝ役ゝの子ゝふくハゝ京
ゝゝゝたゝぎゝゝ内ゝゝくゝゝゝゝ一
ゝゝゝゝハ御ゝゝ

家司之面々ゝ御書をゝト次第
一亭ゝゝ家司ゝ光分素ゝ物以分ゝ引べし
おゝゝゝ御礼ゝ上ゝ甚ゝ指ゝ
三方役人御ゝゝ指ゝ盃ゝ
面人ゝ御ゝ盃ゝ
ゝゝ内ゝ三方役人
ゝ井ゝ指ゝ三方ハ下ゝ盃ゝ
ゝ家司ゝ役人家
ハ下ゝ盃ゝ三人ゝ
下り腕ゝ長ゝ

御膳の方へ向ひ きりとおきのぐり酒をもぶて
其時御膳をそと野八土器を少角なる亀腸
指ぬきをぐるよか腸 焼て七寸ほどにうち
よりをいの形なるよりたをとよりもしの
中へ入れ新三尺もりいろ手をうく
指上げ 載べし 扨亦能膳と御お伴おく
口鍋をもと陸肴乾鮭して汁三方一宝
又あてきりと御孔を中と器を為て肴人の
方へ寄又信のを其信御をたべ三方
此役人心ねてかをこ方へ寄又より此器を

小角より寄三方を御おろす指供其より信くを
決申

一三方此役人れさばくをと家司此るを長
ぬさぐるをよいるを大よきうの其時此きをし
らうくとさばくを能的人をたるを

御茶上る沿対

一御盃沿るを御湯上る湯盃茶を水海をこう入
と茶此役人指参る其内を内をきをたべ
御中猪汁よして御湯をを寄を御中腸肴を
今ら上る追付御茶菓子指出る茶菓子湯

御手水より立て茶を行ふ湯を絶かぐんよして拭出小性元かくべし

一御薬をおハおとるる御茶を拭たるを御
自付元者に元よりませ和絹よ上よ者人の
第列を元封を付釜

一薬より天井よりの廉茶又茶碗百入水指より
水入る此水おとる清水を方こん元者せ百
しゝゝ句る直よ入月をけるよ行ゆくもかろ
きと水者ゝゝを付釜定れ注ぐ行けく
ひへ一茶を元出るとの月付元者に元をよび

此事階俵の壺に入せゝおとして紙を元
べし俵ゝ壺よ入る面ハ水をすまと一紙と
するたゝかるけのの行る水ハ俵壺へ入る時ハ
まる之又毒を消一紙行る茶を〻日本一州
に焼物に上ゝを
一御酒之内又湯茶碗計つよ入月付と元者と
よりませ墨べし一茶門他分茶ハいくして
湯を絶せ下る紙
一大壺よ茶天目茶筒入に茶釜指出荷る
御次に茶碗ゝ入る茶筒入よ茶巾茶釜茶的

くゝ合指申る所ゟ水漏候ハゝ茶器を
かゞる筆遣ハ役こと六七尺ゝ高ゝ
あゝをつき何ゝを書きハへりつき所ハ
何ゝを書あゝく箱ハ対を切茶道ハ先を
たゝ手を八所月付ゟ泊所月付書きゝるべ
ゝ
ゝ盆を指出盆題こと所臺矢月つゝ
ゝ
ゝふこハ平家ハ詳ハ明ゝ付ゝゝ所ゝ書
ゝ
ゝハ指子ゝ家を板本へ所ゝすゝべ一て
相伝ゝべ

洛下藝居　遠藤元閑

一此節所茶を入れ茶入を壺ゝ
一天目ゝ名ぢん大ひぢん陽ひぢん壺ゝ
一井戸茶碗を用ゝ壺ゝ
一唐物ハ茶入蓋内張大事ハ習ゝ
右之ゝ茶伝授ハ百ゝ人ゝ
皆大事ゝ由ゝ
一三人ゝハ所ゝ
伝ゝハ茶碗ゝ帛ゝ
一所茶碗ゝ茶所茶ゝ

一御家ちうよりの定板中ゝる馬ゞ
御深ゝ如ものゝ
一能部口御入ゝ長事もゝ
御事ハおよそ家ゝ
一御屋ゝ事ゝ長事ゝ
の長事を蒔ゝ中付御
小書院之御事
一小書院へ客人と御ゝ
ゝる時家ゝ長事もゝ
ゝくゝ人の御心御事

一夜ゝ入と迫付陰陽一ゝを御相伴と申ゝる時ハ
亭ゝ代かひゝ御事人御一御膳ゝ御膳ゝ
足打代ゝ事奥ゝ御膳ゝ
碗ゝ出ゝ
一御膳ゝと迫付御事事ゝ
ゝ御ハ事ゝ御ハ御
ゝハ事ゝ御ハ
一御ハ事ゝ天月ゝ
ゝ御ハ大事ゝ

一三月廿日御祭も上る

御飯城

一御飯城之儀ハ式代之分ハ大ら之ゝ所ばし御成門ハ此ハ御きりづきぢらちんとぢぼと御立之帝ハ亭主ハ其外橋子沼男之門ハ其外へおて被ケ礼之中ゝ人ゝ紫ハ之ちん行ゝ人ゝ御案内ハ御ゝ

一出院ハ御ゝ之ゝ中ゝ之ゝ此ハ御ゝ

ゝ此ゝ之ゝ一三時ハ御ゝ之ゝ

祝ス之

御礼申成

一御飯城之儀と迫ハ之ゝ今日ハ御様子ハ

御膳ゝ此ゝ之ゝ御ゝ之ゝ中ゝ又

御ゝ之ゝ御ゝ

御ゝ

一亭主ハ其外ハ何ゝ之ゝ

秘ゝ亭主ハ一門中其外ハ何ゝ又日

ゝ此ゝ之ゝ何ゝ

時ハ吹物ゝ礼酒ゝ

とゝ之ゝ月ゝ之ゝ千秋万歳ゝ

此御成敗を三ヶ条八あ後世法度を記載よりも中く上つる此御書を見バ形式に可遵よりつぎの中へあ後世ちがいなくなるべき事を愚意召処八書林に紙筆を反世ばかりひ草ばかりべ一つに色達人をて法世ばかりて編集一つに是代を求めたまへ

元禄九丙子 病留 遠藤元閑敬撰

二

元禄九
丙子